

---

令和5年度 第3回 (2科目・4科目共通)

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和5年2月5日 施行

---

注意事項

1. 試験開始の合図<sup>あいず</sup>があるまで、この冊子<sup>きつし</sup>の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生<sup>あ</sup>どうしの貸し借り<sup>か</sup>もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子<sup>もんたいさふ</sup>の印刷<sup>いんさつ</sup>が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は20ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の――線部のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 友だちの頼たのみをココロヨク引き受ける。
- ② 彼女かのじょはその意見にイギを唱えた。
- ③ 物事のコンカンを学ぶ。
- ④ 学校行事でゲキを観みた。
- ⑤ 生徒会でキフをつのる。
- ⑥ 将来の夢はザツシの編集者になることです。
- ⑦ おみやげは兄弟でキントウにわける。
- ⑧ 彼は我流かれでここまでやってきた。
- ⑨ 至近距離きょりでの撮影さつえいに成功した。
- ⑩ 祖母は深窓れいじょうの令嬢だった。

二 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

ぼくたち人間は、進化の過程で言葉を得たことで、距離を保ってつながれるようになるとともに、身体を使わず、時間と空間を超え、いろいろな人とつながることができるようになりました。

言葉は(注1)ポータブルなものです。重さがないので、どこにでも持ち運びができる。言葉を使うことで、過去に起こったことを、まるで目の前で起こっているかのように解説することができるし、目の前で起きていることを、別の場所、もしくは今ではない時間に再現することができます。自分が行ったことのない場所で起こったことを、あたかも行ったかのように再現して伝えることもできます。①言葉を得た人間は(注2)フィクションを生み出しました。②死を考えられるようになったのも言葉を得たためです。死者と対話できるという幻想も生まれました。(注3)フィールドワークの心得で書いたように、「緑の葉」や「赤い実」も、そう口にした段階でフィクションになります。

一方、言葉をもたない動物は、その場で瞬時に直観で対峙し、解決します。それ以外の(注4)オプシオンをもちません。人間も本来、③同じ能力をもっていたはずですが、言葉の力が大きくなるにつれ、その力が減退しました。たとえば、その場はやり過ぎして、あとで考えるといった状況では、言葉が力もちます。あのとときあの人はこう言ったけど、本当はどうだったのだろう、こんな情報を流しているけど、裏では何を考えているのか、ひよつとしたらとんでもないことを目論んでいるのではないか、などと言葉にこだわってしまう。これは、言葉による幻想、フィクションに侵されている証拠です。フィクションが前面に出てくれば、動物のように生の感情のぶつかり合いを通じて瞬時に何らかの解決策を見出す、という人間本来の能力が落ちていきます。

こうして今、人間の世界には、身体を通じたコミュニケーションをまったく無視した社会が出来上がっています。

人間は、言葉でルールをつくっています。たとえば、保育園では、「ねんねの時間ですよ」「一列に並びましょう」と言われて、子どもたちは眠くないけど眠らされ、並びたくはないけど並び。小学校もそうです。「今日は朝礼があるから整列する」「教

室に入ったら席につく」。こうした言葉による規則が先にあって、自分がしたいことより、その規則を守ることが先決になります。会社のルールや法律など、すべて言葉によるルールです。

ゴリラの場合、何の挨拶もなしに2メートル以内近づいたら、身体が「えっ、何かおかしいぞ」と反応します。この「2メートル」という距離も、ぼくが感じたことを言葉に翻訳しただけで、実際の距離は状況によって異なります。でも、その距離はその場にいればわかるし、ゴリラが何かを訴えてきていることもわかる。「何か興味があるものがぼくの周りにあるんだな」「ぼくと遊びたがっているんだな」「ぼくの隣に座りたがっているな」ということは、目を見ればわかります。何かいたずらをしようというときには、目がキラキラと光っています。ゴリラの行動や表情を受けて、ぼくは瞬間瞬間に理解し、どういう行動をとるかを判断します。こうしてぼくが身につけた彼らの「行動文法」は、「こういう行動をしたからこうだ」「こういう表情をしたからこう」などと言葉だけで表すことはできません。

かつては、人間も、**X** 感覚でさまざまな問題を解決してきました。お互いの関係や環境は毎日変わります。こうすれば今日はこうなるということ直観で判断して互いの関係を調整していました。

ぼくが子どもの頃もそうでした。自然は日々変わるものだから、ぼくらも変わらざるを得ません。雨が降れば、太陽が出れば、遊ぶ場所も方法も変わります。その度に、友だちと顔を見合わせて、気持ちがつながっていることを確認しながら、互いの関係を調整していました。それは、ゴリラの社会にとっても近いものです。こういう子ども時代があったからこそ、ぼくは、言葉では理解できないゴリラの群れに入ることができたのかもしれない。ゴリラの場合は、人間と表現の方法が近いから、余計わかりやすかったのです。

ところが、今の人間社会は、不変のルールに従うことが日常生活になっていきます。言葉が先行しているから、身体が感じていることより言葉を信じる。ルールが合わなくなるときにすぐに調整することができないために無理が生じます。

科学技術には良い面もあれば悪い面もあります。最初は良い面に注目が集まりますが、ある域を超えると今度は(注5)ネガティブな面が強調されていきます。④ダイナマイトを考えてもそうでしょう。最初は人間の力が及ばない物を壊すために非常

に役立つのに、それがやがて社会を破壊する戦争の道具に使われるようになりました。言葉も同じです。

言葉は、人間が手にした技術の中で最初にして最大のものといってよいと思います。人間の認知能力は、言葉の発明によって一度つくり変えられました。これが、「認知革命」と呼ばれるものです。かつて言葉は人々の間のトラブルを調整するための交渉にも使われていたはずだし、集団間の暴力を鎮めるためにも使われていたでしょう。だから人間は集団を大きくすることができました。国家という巨大な組織をつくることができたのも、言葉によってバーチャルな世界をつくり、その物語を共有してみんながまとまれるようになったからです。ダイナマイトと同様、最初は言葉もよい作用をもたらしました。しかし、やがてその言葉が、暴力をつくり出すために使われるようになって、だんだん人間にとってネガティブな作用をし始めます。

言葉を発達させるうちに、文字も生まれました。最初は、石や木に書いていた文字を、紙に書くようになり、やがてそれを印刷するようになる。さらに技術が進み、テレックスができ、ファクスが生まれ、そして今、ぼくたちはインターネットを通じて電子文字でつながるようになりました。

そもそも文字を介した理解には、常に疑いがつきまといまいます。会って話していれば、発せられた言葉だけの意味ではなく、相手の顔の表情や仕草、声色から裏の意味や背景を同時に感じることもできます。相手の言葉を聞きながら、「おそらく嘘を言っているな」とか「本気みたいだな」と思ったりするのは、人間は言葉を話しているとき、無意識のうちに感情を出すものであり、同時に相手の感情を読み取る能力をもっているからです。話し手は、相手の解釈が間違っていると感じたら訂正することができません。本来、言葉の役割が発揮される場所は、<sup>④</sup>こうしたやり取りが可能な場面でした。

しかし、文字は読み手本位のコミュニケーションツールであって、対話ではありません。書いた人はその場にいないので、読み手の勝手な解釈が許されます。読み手本位であるために、ときに誤解を生んで書き手が思ってもいなかった結論になったりします。再現する過程で誤解が生じるのは当たり前で、それを避けることはできないのです。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』)

(注1) ポータブル⇨持ち運びのできる大きさ・重さであるさま。

(注2) フィクション⇨想像力によって作り上げられた話。

(注3) フィールドワークの心得⇨筆者はフィールドワーク（現地調査）をするときの心得は、「動物の五感で自然を捉えること」であると述べ「自分の視覚で捉えたものを自分の持っている言葉に翻訳した時点でフィクションに作りかえられてしまっている。フィールドワークではあえてそのフィクションを頭の外に追いやることが不可欠だ」と説明している。

(注4) オプション⇨自由に選択できるもの。

(注5) ネガティブ⇨否定的なさま。

(注6) バーチャル⇨実体をとまなわないさま。仮想的。

(注7) テレックス⇨電話回線で相手呼び出し、キーボードで入力して情報を送る仕組み。

問1 — 線部①「言葉を得た人間はフィクションを生み出しました」とありますが、人間がフィクションを生み出せるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 言葉が時間や空間を超えて出来事を再現する機能をもっているから。

イ. 言葉が知らない人同士を結びつける機能をもっているから。

ウ. 言葉がものごとを感覚で理解するのを助ける機能を持っているから。

エ. 言葉が人間の行動をしぼりつける機能を持っているから。

問2 — 線部②「死を考えられるようになったのも言葉を得たためです」とありますが、「死」を考えるとときに言葉が必要なのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 「死」は、ふだんから身近に考えるようなことではないから。

イ. 自分の「死」は、自分が生きている間には経験できないものだから。

ウ. 「死」は、想像力が生み出したものであって、現実には存在しないから。

エ. 自分の「死」は、生きている人間にとっては理解が難しいものだから。

問3 — 線部③「同じ能力」を具体的に説明した部分を本文中から探し、「能力」につながるように二十五字以上三十字以内でぬき出して答えなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

問4 文中の空らん X に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 距離 きょり    イ. 言語    ウ. 方向    エ. 身体

問5 — 線部④「ダイナマイトを考えてもそうでしょう」とありますが、「ダイナマイト」の例を提示したのは何のためですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 言葉にも人間にとってプラスとマイナスの両面があることを説明するため。  
イ. 言葉にも解決できない問題がいくらでもあるということを説明するため。  
ウ. 言葉には人間の能力を補う機能があることを説明するため。  
エ. 言葉には現代社会における人間関係を破壊 はかい する力があることを説明するため。

問6 — 線部⑤「その物語」の示す具体的な内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 言葉を用いたことで成長した「人間の認知能力」 にんち  
イ. 言葉を用いてつくり出された「国家」という考え方  
ウ. 言葉を用いることで協力するようになった「人間の交渉術」 こうしょうじゆつ  
エ. 言葉を用いて生み出されていった「国家の理想」

問7 — 線部⑥「こうしたやり取り」とはどのようなやり取りですか。その内容を四十字以上五十字以内で説明しなさい。  
句読点などの記号も字数にふくめず。



三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

武井岳はバスケットボール部に所属する中学一年生。岳のクラスでは、指揮者の水野早紀、伴奏者の井川音心を中心に、合唱コンクールに向けて朝練に励んでいる。岳と同じバスケットボール部に所属する山東涼万は、「コンクールの朝練に出ないでバスケットボールの練習をしよう」という岳の誘いを断ってコンクールの朝練に出ている。そんなある日、岳は幼なじみの金田晴美（通称キンタ）がオンチだと数名の仲間と話してしまった。次の場面は、岳が弟の隼人を保育園に迎えに行った帰りに、公園でバスケットボールをして遊んでいるところである。

岳が打ったシュートがゴールに入るたびに、隼人は、やった、やった、と跳ね回った。

隼人には重すぎるボールだが、やりたそうにしている。岳が隼人とボールを持つて構えだけ教えていると、公園を横切つてバタバタ走る女子中学生がいた。

岳は隼人の背にかぶさるようにして、両手でボールをサポートしたまま、目だけでその姿を追った。  
ん？

「おい」

思わず立ち上がつて叫んだ。女子中学生は一瞬スピードをゆるめ、ちらりと振り返つたが、また加速した。

「おい、無視すんな」

晴美はあきらめて立ち止まると、振り向きざまに岳を睨みつけた。

顔からは玉の汗が噴き出ている。一呼吸おいて、晴美はフンツと鼻先を斜めに上げた。

「何だよ、お前。フンツてそれ少女漫画かよ。何怒つてんだよ。脚だいじょうぶ？ とかないわけ？」

岳はサポーターを巻いた右膝を突き出した。

「は？ シュート打てるのに心配しろって？ それ甘いわ」

「別にお前に心配してほしくないわ」

眉間にしわが寄ってくる。

「①話、矛盾してるし。あー、わたし、あんたと話してる暇ないんだわ。早く帰って練習しなきゃ」

「何の？」

「あんたには関係ないし」

「あ、まさか合唱の？ 無駄な努力だぞ。キンタ、お前はさ、オンチなん……」

岳は言葉を切った。晴美の顔に釘付けになる。

あ……。

晴美の目に涙がみるみると膜を張った。晴美は涙がこぼれてしまわないように、体に力を張って、きつと息を止めている。でも耐えきれなくて、吐く息といっしょに瞬きをしたとたん、転がるように涙の粒がこぼれ落ちた。

頬を伝う涙は、玉の汗といっしょになって、差し込む夕日にきらきら光った。

……綺麗だ。

喉がつまって苦しくなった。鼓動が内側で響く。

晴美は腕で顔をこすると、はたと駆け出した。

追いかけてい、と強く思った。②だのに体はぴくりとも動かず、岳はただぼうつとその後ろ姿を見送った。

「……がつくん」

しばらくして、隼人の声で我に返った。正直、隼人がいたことも、忘れていた。

「あのお姉ちゃん、はるちゃん？」

「えっ!？」

ドキンとした。早口で続けた。

「そそそ。はるちゃん」

はるちゃん。

口に出して呼ぶのは何年ぶりだろうか。③重苦しい胸の奥でこそばゆい感じが走った。

「がつくん、はるちゃんのこと泣かしちゃったね。ぼくも今日、みっちゃんのこと泣かした」

「マジか。お前、あやまったか？」

「うん。がつくんも、あやまんなきやダメだよ」

晴美の涙顔が浮かんだ。

あれはひよつとして、汗か？

んなわけないな。隼人だって、俺が泣かしたって言った。

俺が傷つけちゃったんだ。

オンチのこと——。

そんなに気にしてるって知らなかったんだよ。

岳は晴美が去った先の方を見つめた。

「……だよな」

週明け、岳は部活の朝練に向かった。まだ痛みが残っていたので、普通の練習は見学するつもりだったが、ひとりでシュートを打つくらいなら出来るかと思った。

本当は安静にした方がよいのかも知れない。でも、部活を休んでいるあいだに、涼方に抜かされるわけにはいかない。絶対に嫌だ。

今日も朝練の開始時間のずいぶん前に、体育館に入った。誰もいない体育館はしんとして、バスケットシューズが立てる、キョッキョッキョという足音さえ、天井に立ち上っていく。

ゴールの前に身構える。ゴールを見据えて打とうとした瞬間、白いバックボードに晴美の顔が現われた。急に力が抜けて、中途半端になってしまったシュートは、ゴールまで届かずにバウンドしていった。ボールがバウンドしていく音が、胸にずんずんと響いた。

あれからずつとこうだった。

あの晴美の涙が、何度も何度もフラッシュシユバックしてきて、どんなに払おうとしても、気づくと晴美のことを考えていた。朝露に濡れたうぶ毛の生えた葉っぱに、一粒の大きなしずくがきらりと光っているようだった。

くそつ。切り替えろ。

今はバスケの練習をしているんだぞ。

④自分で自分を鼓舞する。

そのあと、十発打ったが、一発もシュートを決められなかった。こんなことは初めてだった。

サポーターをした右膝をのぞき込んだ。こないだ隼人と公園でシュートしたときは、なんの違和感もなかったのに、今日は少しおかしい。

そつと曲げたり伸ばしたりしてみる。やはり、痛みがある。岳はゆつくりとその場に腰を下ろした。体育館の床はひんやりとしていて、尻から背筋の方に冷たさが伝っていった。

両膝に顔を埋めると、ハッカみたいな湿布の匂いが鼻をスースーさせた。もう一度顔を上げる。バスケットゴールを見上げた。

先輩たちにまぎって、涼方が放った見事なシュートがよみがえった。

なんであいつのプレーは、あんなにスマートなんだろう。

認めたくはないが、涼万のことを羨ましいと思っっている自分がいた。

どうしてなんだ、あいつはたいして努力もしていないのに……。

今はまだ、かろうじて力は拮抗している。でも、もし、涼方が本気でやり始めたら、いつかうんと差をつけられてし

まうのでは……。

ため息を長く静かに吐いた。息を吐いても、胸はちっとも軽くならなかった。

しばらくぼんやりしていると、体育館の脇を何人かの生徒が話しながら歩いている声が聞こえた。合唱の朝練に行く生徒たちだろうか。だとすると、間もなくバスケット部員もやって来る時間だ。岳はのっそり立ち上がった。

やがてバスケット部の朝練が始まり、岳は壁にもたれて見学していた。先輩たちのプレーを目で追いながらも、<sup>⑥</sup>気持ちは遠くに離れていた。岳はこっそり体育館を抜け出した。

もう合唱の練習が始まっているのか、校舎のここから、歌声が漏れ聞こえた。合唱の朝練をしているのは、うちのクラスだけではないらしい。晴美のことが気になって、岳の足は自然と教室に向かっていた。

少し緊張しながら校舎の階段を上がる。三階まで上がって、一息ついた。五組は一番手前の教室だから、すぐそこだ。なるべく教室から離れた廊下のすみっこをそろそろと進んで、びっくりした。教室はからっぽだった。

あれ？ みんなどこ行ったんだ？

首をかしげると同時に、廊下の一番奥の音楽室から、『ソノリテイ』のピアノ伴奏が聞こえてきた。五組の練習は、音楽室でやっているらしい。

岳は音楽室のそばまでやって来た。幸いにもドアが閉まっているので、中からは見えないはずだ。耳をそばだてる。

こないだ部活の朝練が終わったあと、廊下で聞いたときは、晴美の音がすごく目立っていた。そして、ついオンチのことをばらしてしまった。

ひよっとして、あの会話がキンタに聞こえてしまっていたのか？ そうに違いない。それであいつ、あんなに怒ってたんだ……。

岳はうなだれた。そして今、晴美の音が全然目立って聞こえてこないことに、さらにうなだれた。あいつ、オンチのこと気にして、歌ってないのかも知れない。

首にかけてスポーツタオルを、両手でグッと引っ張った。気づくと、曲が終わっていた。

「今の、とつても良かったと思います。もう一度やりましょう」

指揮者の早紀の声だ。

「待って。ちよつと提案があるんだけど」

今度は音心の声だ。

「五組の合唱、すごく良くなったと思うけど、どのクラスも X で、絶対に勝てるってところまでは、いってないと思うんだ」

みんなが少しざわついた。

「だから勝つには、(注2) 奇策がある。で、提案なんだけど、最初の四小節のAメロって、三回繰り返しがあるよね。その二回目のAメロをソロでやったらどうかかな」

「えっ、ソロ!?!」

今度は一気に騒がしくなった。

「うん。正確に言うるとソロじゃなくてソリかな。ソプラノとアルトのふたり。たとえば伴奏はこんな感じで、すこし抑えめにして」

そう言うとき音心は、アレンジしてさらさらとピアノを奏でた。

「おお。なんかいい感じだね」

教室がわいている。

岳は音心の即興演奏に、大きく息を吸い込んだ。きっと音心も涼方みたいな天才肌には違いない。

「なあ井川、それで誰がソリつつーのやんの?」

「うん。このふたりしかないと思ってるんだ」

教室の中のちよつとした緊張が、廊下まで伝わってきた。

「水野早紀と金田晴美」

「反射的に岳の肩が跳ね上がった。」

「えっ！」

晴美の大声が響く。それをスルーして、音心は続けた。

「早紀、ソリの間は指揮をせずに、前を向いて歌うんだ。出来るよね」

いちおう質問形だが、その言葉には有無を言わせない迫力がある。おそらく早紀は、(注3) 気圧されてうなずいたのだろう。

「金田もOKだよ。じゃ、早速やってみよう」

ざわついた空気が、すっとおさまった。前奏がまさに始まったとき、晴美が声を上げた。

「ごめん。わたし、やっぱ無理」

音心は演奏を止めた。

「どうして」

「出来ないよ。みんなに迷惑かけちゃう」

岳の胃のあたりが、きりきり締めつけられた。

いつも自信たっぷり、あんなに目立つのが大好きなキンタが……。頼まれたことを引き受けない(注4) ネガティブなキン

タなんて、今まで見たことがない。

晴美の涙顔がまたフラッシュバックした。

宝石みたいに綺麗な涙が、玉の汗の中で光っている。

握りつぶされたみたいに、胸がギュッと苦しくなった。

キンタ、やれよ。あの天才井川が、お前がいつ言ってるんだから、だいじょうぶだよ。

祈るような気持ちになった。

「誰か他の人……」

晴美の中途半端なつぶやきに、岳は思わず前のめりになって、音楽室のドアに手をかけた。

出来るよ、キンタがやれよ！

ドアを開けてそう言いそうになったとき、誰かが言葉を放った。

「なあキンタ、まずやってみようぜ。それでダメだったら、また考えればいいじゃん」  
しばしの沈黙ちんもくののち、晴美の声が続いた。

「……うん」

教室に安堵あんどのどよめきが広がった。

岳はそっとドアから手を離れた。しばらくそのまま、ぼんやりしていた。音心の前奏が始まり、合唱に入った。涼方か……。

⑥ 岳はつま先を見つめた。さっきの声は間違いなく涼方だった。涼方のひとことが、晴美を勇気づけたのだ。

——はじめはひとり孤独こどくだった

気づくと、音心が提案したソリパートが始まっていた。岳はハツとして顔を起こした。

——ふとした出会いに希望が生まれ

新しい本当のわたし

未来へと歌は響きわたる

音心の抑えめな伴奏にのって、早紀と晴美のふたりの声が重なり合う。

早紀の透すき通とおったまっすぐなソプラノに、晴美の憂うれいのあるビブラートの効いたアルト。清らかさと切なさの相反するようなメロディーが混ざりあって、新しい音楽が生まれた。



岳は知らず知らずのうちに、腕に立った鳥肌をさすっていた。

ソリパートが終わると、ほんの少し間を置いて全員での合唱が始まった。いつもとは迫力が違った。

岳は音楽室から離れた。歌が終わってみんなが出てきたとき、<sup>⑦</sup>こっそりそばで聴いていたことを知られたくなかった。

階段に足を落とすようにゆっくり降りた。だんだんと歌声が遠ざかっていく。やがて曲が終わったのか、大きな歓声と拍手が聞こえた。きっと、ソリパートが大成功して、みんな盛り上がっているのだろう。

バスケの練習をしているわけでもなく、合唱でひとつになりつつあるクラスの一人にもなれていない。

俺、何やってんだろ。

一階に続く踊り場で立ち止まった。どこかですれたわずかな隙間から、冷たい空気がすうすうと体に入ってくるみたいだった。

(佐藤いつ子『ソノリテイ』)

(注1) 拮抗<sup>きっこう</sup> || ほぼ同じ力で互いに張り合うこと。

(注2) 奇策<sup>きさく</sup> || 人の思いつかない変わったはかりごと。

(注3) 気圧<sup>けお</sup>されて || 相手の勢いに押されて。

(注4) ネガティブな || ここでは「消極的な」の意味。

問1 — 線部①「話、矛盾むじゅんしてるし」とありますが、どのような点が矛盾しているのですか。その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 本当は部活に参加していないにもかかわらず、強がってシュートを打っている姿をわざと晴美はるみにみせている点。

イ. 実際にはシュートを打っているのに、晴美に脚あしのケガを心配してほしそうな態度をとっている点。

ウ. 晴美を怒おこらせるようなことを言っているくせに、自分の脚のケガを心配しない晴美を責めている点。

エ. 晴美に脚のケガを気遣きづかうことはできないのかと言っておきながら、心配してほしいわけではないと言っている点。

問2 — 線部②「だのに体はびくりとも動かず、岳がくはただぼうっとその後ろ姿を見送った」とありますが、なぜ岳はそのようになつたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 晴美が泣いたことに動揺どうようし、謝あやまるべきだということは頭ではわかっているが、晴美の涙なみだに見とれてしまい、動けずいたから。

イ. 晴美が急に泣き出したことが信じられず、自分は悪くないと思ったが、晴美の涙なみだを目まの当たりにして、どうすればいいかわからなくなつたから。

ウ. 晴美が泣いたことに驚おどろき、その涙を見て初めて晴美への思いに気がついたが、追いかけると自分の気持ちこころが晴美に伝わってしまうと思つたから。

エ. 晴美を泣かせてしまったことに罪悪感を覚え、謝りたいと思つたが、晴美に責められるのが嫌いやで、ためらってしまったから。

問3 — 線部③「重苦しい胸の奥でこそばゆい感じが走った」とありますが、このときの岳の心情の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 晴美が怒りだしたことに納得できず不満を感じていたが、昔の呼び名で呼んだことで、無邪気な子どもの頃の関係に戻りたいという思いに駆られていた。

イ. 晴美を泣かせてしまったことで罪悪感を抱いていたが、昔の呼び名をしたことで、子どもの頃に戻ったような懐かしさや気恥ずかしさを感じている。

ウ. 晴美が泣いたことで晴美への恋心に気づいてしまったが、幼い頃の呼び名を口にしたことで、昔のような気軽な関係には戻れないことを残念に思っている。

エ. 晴美を怒らせてしまったことに後悔を感じたが、懐かしい呼び名をしたことで、子どもの頃を思い出して気まずさが少し軽くなったように感じている。

問4 — 線部④「自分で自分を鼓舞する」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分で自分の進む方向を切り替える。

イ. 自分で自分の感情を落ち着かせる。

ウ. 自分で自分の気持ちをふるいたたせる。

エ. 自分で自分の弱さを見つけて反省する。

問5 ー線部⑤「気持ちはずくに離れていた」とありますが、この時の岳についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 晴美のことが気になって自分の練習がうまくいかないだけでなく、たいした努力もせずにスマートなプレーができる  
万に対する焦りも重なり、先輩たちの練習に集中できずにいる。

イ. 晴美のことを泣かせてしまったことがいつまでも忘れられず、どうしたら許してもらえるのかということばかりを考えてしまい、練習する気持ちが失せてしまっている。

ウ. 合唱コンクールの練習を抜け出してまでバスケットボールの練習をしているにもかかわらず、一向に自分のプレイが上達しないことを感じ、練習する意義を見出せずにいる。

エ. バスケットボール部の朝練に参加せず、合唱コンクールの練習に熱中している涼の方がチームメンバーから高い評価を受けていることが悔しく、見学だけの練習が嫌になっている。

問6 本文中の空らん X に入れるのに最も適切な表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 木を見て森を見ず      イ. 青菜に塩      ウ. 芋を洗うよう      エ. どんぐりの背比べ

問7 — 線部⑥「岳はつま先を見つめた」とありますが、ここからわかる岳の心情の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. バスケの技術で涼方に追い抜かれそうな矢先、涼方も晴美に好意を抱いているような振る舞いをしたので、さらに焦りを感じている。

イ. バスケの能力ではかなわないと感じていた涼方に、晴美への言葉がけでも先を越されたように思い、自分の無力さを痛感している。

ウ. バスケで優秀な涼方が、晴美への対応でも責任感のある言動をしたことで、クラスでの自分の地位がおびやかされると思い、怒りを感じている。

エ. バスケで努力もせずに自分を越えていく涼方はねたましいが、後ろ向きになっている晴美をやる気にさせてくれたことには感謝をしている。

問8 — 線部⑦「こっそりそばで聴いていたことを知られなくなかった」とありますが、なぜ岳はみんなに知られなくなかったのですか。このときの岳の心情を具体的に四十字以上五十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくめ  
ます。

国語解答用紙

教室番号
座席番号
受験番号

氏名

\_\_\_\_\_

一

⑨	⑤	①
		<
⑩	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④

〔注意〕※のらんには何も書かないこと。

二

問 1

\_\_\_\_\_

問 2

\_\_\_\_\_

問 3


25

能力

30

20

問 4

\_\_\_\_\_

問 5

\_\_\_\_\_

問 6

\_\_\_\_\_

問 7


50

40 20

三

問 1

\_\_\_\_\_

問 2

\_\_\_\_\_

問 3

\_\_\_\_\_

問 4

\_\_\_\_\_

問 5

\_\_\_\_\_

問 6

\_\_\_\_\_

問 7

\_\_\_\_\_

問 8


50

40 20

※

※

※

※

※

※

※